

823  
M8N2

西江入楚

夕航

4

*[Faint, illegible handwriting on the left page, possibly bleed-through from the reverse side.]*

*[Faint, illegible handwriting on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.]*

夕類

十六歲

其比海六系清息而之次為訪大武乳母造例為五系家行夏  
今年所息而七四秋好中八案成治夏

同時見付夕款宿行夏

使以身折必之次至人女出扇令置花夏

其扇下有哥則又清氏遣返家夏

其後系六系清息而行事

惟之系之次同夕息案門給奉

伊子守上洛之夏

清氏又宿六系行夏

翌朝与女房中相君戲給奉

侍童折檻獻之夏

惟克夕息宿垣間見夏

惟克修共夏

八月十五夜留夕款宿与女房同車向河原院夏

同十六夜夕魚君為鬼所厭鬼頓滅也 年十七  
年移夕魚君於東山色也

右近君同系也

源氏解釋為居二条院事

同十八日夜源向東山見夕魚君死骸行事

歸京之時於河原堤落事

右近君眷信二条院也

九月末右近君物語之次始知夕魚君始終也

空蟬君奉消息於源氏則遣五方

茲人か得海西津方也

源氏贈軒葉萩弁事

夕魚上四十九日佛也於比叡山法花堂修之也

文章博士作於文也四十九日十月五日アタリ

十月一日伊予守伴空蟬君下玉也

源氏餞送檜扇也 又玉を落衣也

夕魚

並二

三位中女折夕魚花玉扇送源氏云歎云河海も事

必源氏十六歳也廿及より十月よりなるみより是に世に也

心弁并釣為也名也 秘日之

堅乃なりいし空蟬也その月日よりなり見必也

美云尚流の美夕魚と此列傳なり

美史中物語を三十八と十よりしていふとよりなりなり

阿多のく源のく ねばなり

六条のこころは清女はけりてこれに終

<sup>何</sup>六条清貞前防清貞中防清貞貞信公女後よ重明

親王はゆふよなるふば例を母父の女清女大女以下一

伊勢の終云むじうたのおりいまうら君いませりりきり暖

茂はれかより六条よりよあといと面白く候りしり

<sup>必</sup>六条清貞前防清貞のりそりめきりい出せり

文彦右子重明親王はるやと前燈小室より掃本をい

くは清くさるく而ともきりいば物よりより出たり

義云六条清貞前防清貞の原の密通れる始くあらり候といふ

は心あよりばりると知りては物終れ筆は

又さきよ中をきりりといききり席とちと帯不れ出ひく

は清くさるく而ともきりいば物よりより出たり

大臣 六条清貞前防清貞 前防相登帝清中

貞信公 中防清貞貞子 前防保明親王の貞信保明文彦右子

後醍醐天皇御記より北方成は例

醍醐帝

保明親王

前仿謚号文彦太子 慶長王

聖明親王

兼文彦 敬子女王

桐垂帝

光原氏

母六条清具而 大長女

前仿

秋好中文

桃園武部日文

槿母院

三宮 板取水方

葵上

いねりよお坊とまゝり子細は延長の時代よ長文女おお遠きよ  
よりてこ 前仿文彦太子早世を以て子お交れ玉りしはきこ

東文よ成りし月く早世仍兼養院之坊

延長の時代とまゝりてこありよお坊は号あり 已上兼養也

和云前仿とい文彦太子なりしものこくまゝりし位より兼

治りぬいよ早世志のい武小一条院は長文の位を稱し

ゆよ是皆お坊に但小一条院は後よ号院よとあり

日下りまゝりしあり 兼養院より六条へ直よおとすはあり

大武のめれとの

源氏これめのとこ惟光の母

乳母 職負令有於毗奈耶日各師子胤其父以児授入

乳母 花岩經云檀波羅密為乳尸羅波密為乳母文字

集畧曰孀色及成云乳母 知乳母 乳人母 或云信母

唐武云皇子皇孫 乳母和名 女能度

史記傳云武帝少時東武候母掌養帝今仕時號之曰大乳母

神代下日本紀云天孫取婦人為乳母湯母及飯爵湯坐 矣凡

諸神部備行以奉養字干時權用他婦以乳養皇子受此世取

乳母養兒之縁也

令云凡親王及子者皆給乳母 謂若口親王嫡諸王取生子者不  
在給斯

親王三人子二人取養子年十三以上雖乳母身死不得更立

替 古今集作者記乳母 陽成院清乳母 大江守繩女

源氏これ清めれと皇子の例は二人ありまゝ親王は清くありハ

三人ありし下れ利よこりてまゝりてありしあり

のりりち武のこははるよた武のめれとこあり未

橋をたぐりしあり乳のとれ較のり花をよこり

尾よなりよけぬ

大武のめれとの病風尾よなり

流しひとく尾よなりぬりなり

大條なる家

大武のめれとの家なる人のたなり

御車ひのふさか

常一八門とくさう

惟少のめささく

竹たうつ不限養のたぬ

名をわついせりば物続りい名字と載るま

りいりなるのふらり年三けつ

るえ就中惟之良清を楊名外中文とく

りいりなる九條右兼相記云天曆十一年三月廿日著南

園文範胡申惟光胡可為取監之由其詞次牙相遠

いふ寛弘之以は名字をま

多原惟光 寛弘之年正月名任陸女外同六年三月廿日任

平惟光 長保六年正月四日任在る文元 寛弘六年正月廿八日任右出門才少尉同七年二月十六日任右近将監長和六年正月九日補参人見指記

大菴是光 寛弘元十一七任越前才大掾

曹井是光 寛弘二二才任因幡大目 冷皇院御給

菅井是光

寛弘三十才任参乃才大目九出門管

いふいといと人なり

又所堂園申文良清惟光申楊名外

私言箋よい箋と奥よ領とく

而よたるん

ましこせ

源の所車と多て

門とわつうせ

そらう

路所路 日か化

大略 美葉なる

位還たりのおわく小

い家のつこり

いう

半藤 下

よまるとと

車はと大なるの車に

かゝるほとらへてうり行ふよらうし 後日  
日後拾遺雜一 云月のあつらゆる夜のそとつらふよ女とこれ  
色くゆるり成男系んたなとつひい入させゆるる候人ふか  
他とくあられこの宿といひあつら月よりおれ人といりく  
後中是は候の下の公なり

正しきあたるといししる いろさしたるまふこれの歌也 後日

安中入るをたうていわくしきに翠ありあり 安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

なつこいつきのまきこしけ 安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば  
多りよゆるりゆらん 安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

又のいわりりこころ 移うるをらんかといやうらん  
きりけつりき 安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

ありいぬりりこころなり 日一島もさむしとこれ下りの

安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば  
安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば  
安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

浄車といふまじりの

細代車と前出のわりきり

私凡車はまじりの 細代車と前出のわりきり  
の友の文と中細代車と前出のわりきり

安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば  
安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

さきしかりせりり 安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば  
安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば  
安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば  
安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

恐是警前河白警 独誇歎段遠湖行

浄車といふまじりの 安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば  
安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば  
安中夕魚もさびのそく女たの中なるはば

かゝるほとらへてうり行ふよらうし  
諸織戸なりしとん



秘 折るるありき 美おあ

いりこころしき 奥入世中さいつこころしき してりるたうん

行と夕りよそ屋とくけこ母家

秘 源と玉此屋よい片し信りつ身うとくばさうれま信居とんそ

歌奪しりまう好勝 源の性たてり好勝こ

美言は小家のさぬとくそ源の歌奪好勝こ之界に客令れしく

なれは玉橋金友に定まりりる 幸信めさういよ何れ

美言はりやとお前 玉れしてありとら西よ

何よせん玉れしてあは八平むらうたらん者よやうりて好勝

は川舟不叶きうりき

美言は宇治よ浮舟君れ白多入公うりりりり何分業ああり

うれは何とわらんうらむきうり何いさういあり 業はは

秀つれぬとうしあまやとら路のくいいなく所免れし桂玉

彦うと和り琴れ色とを待と備せまきうりる浮舟君うせり

後業大おの不者ありやうりり 合せりまきを是し夕

息上の来うり かりき前表うりうりれははととあり ば

お陰ようやうれ歌多し 公とつけくありき

うりうけうりの 公明抄云公良之位の鏡ふとく秘りせよ

いひれれとわれうらううさうん大業 合れ志とわとる物

今陳府する前よ是とる 業書 秘云信いのおひと何

うまうまうと信よ信いのおひとさうりうをといよ

美言今と日信承子府のお赤よいれうりかりよ用りま

はと信れぬと何美と戦也 秘田

美言信の代り 板うくまをまの信はさうりこさうりかけ

白き必そかのれあうりえうのまも御け

早晩殊平宅用眉見君強用答口辰秋眉

うにくよ君らあうりさ川あれ柳のまもる今を御うる 日記

夕魚のつわと蚕ねまゆよ似りあよいつりいりりこ小家の

皮何れあうりよあうりあれ必のふこ 秘田

美言はりやとお前 源の性たてり

美言はりやとお前 源の性たてり 日記

ば平分ハ栢道ニテ此と白く嘆クハひとりよ今夕魚の  
心よありいひさくらいれい

秘 白く嘆ふ小夜はうく栢道と用ふさうりり續古今小夜方  
嘆よかりなきうへよとていさ若と初り初一夕ふかばれ

後村新長 此の心とより用いりたり

後村新長 此の心とより用いりたり

日新後古今 此の心とより用いりたり

美中うちうたはと行とより白く嘆の心を月りのうらさきと  
さいひいりりむさうと津路身と安く白く嘆ふハ何れを  
たりと何れと安く若とうらさき

こまいさんはいぬく 津路身

美中深ハ高友中始也小夜身よりうらさき

ハ聖道志子甲斐の黒弱よ今余若く元とけりゆりよ泰川橋  
一人清るさくはよ若くめりり是は身はたうらさき

彼白く嘆ふとらん 源氏若くはさくはとけり

ゆふさ何の心そりり何れも極津路身夕魚とさき

美中公あり津路身たり

必の名を人めさうく 秘 夕魚は信の人のあまうらさき

美 顔とりの字よ若く人めさうり

あわ 新又新と云はうらさき 信の心を若くはさきとさうらさき  
あわ 昔うらさき

あわ 昔うらさき 信の心を若くはさきとさうらさき

あわ 昔うらさき 信の心を若くはさきとさうらさき

秘 仙窟より 美中とさうらさき

山風の吹のまじり 美中とさうらさき

美中とさうらさき 美中とさうらさき

美中とさうらさき 美中とさうらさき

美中とさうらさき 美中とさうらさき

美中とさうらさき 美中とさうらさき

美中とさうらさき 美中とさうらさき

美中とさうらさき 美中とさうらさき





いふくともいふはれは海の家くこ

惟光の兄の阿闍梨

大貳のりれとの子と

安惠 門供奉

慈覺大師清才子天台座主才子

始神阿闍梨

私云阿闍梨ハ梵語也

無煩惱ト及スルナリ

惟光 山阿闍梨

惟光ヨリ兄トアリ

少将命婦

兼河守妻

心と口ハ大貳乳母の一腋の兄也とば子とてれ内とひく

かりしと海の家清と海はよりと

まことなう義と

私云又なう義を月あて

又なうきりたり

一説云いまさあれたるは清氏大貳のり

とらあよりおとらりゆとらりゆとありけり

かー守りあき身たるれと

大貳のりれとの何也

清まへよとあり

私云さぬとらとらありて海の家清あり

即しくとありとらとらありて海の家清あり

うらとらとらあり

信條 カニヤスラウト

いむとのある

受戒たり

必尼も加くハ八系戒とありりたり

秘八系戒者

殺生戒

始諸佛不殺生一日一夜不殺生戒能持否

偷盜戒

始諸佛不偷一日一夜不偷

邪淫戒

忌語 飲酒 同上

始諸佛不坐高太座一日一夜不坐高太座能持否

始諸佛不著花鬘瓔珞及香塗身塗一日一夜

始諸不自飲寐及故作觀不一日一夜自飲寐及

故作觀聽戒

殺生 又活

いふあんわらさかきけの

兼光氏君へ書面してしせゆ

うらあはまのししれたう義の今うの智恵を承て地念ありて守るゆ

ようけふれく とうけふれく

日にかこるりて

兼光氏の何

世とられあ

兼光氏ありあ

うらあはまのししれたう

海の家守りてしせゆ

あはれあはれのうらあ

九品の中上品とせしめ





よゝわゝは自前と稱し〜自然友女たしとの私の義と  
あゝく〜これし〜きのの附るお替り〜種ま〜り〜と〜  
然ハ夕息と此奇〜よあ〜さ〜り〜おと〜  
字〜し〜〜さ〜り〜義〜う〜然〜と〜  
露ハあそ〜れ附のそ〜めた〜り〜  
次ノ洞よ夕息との奇〜よあ〜さ〜り〜  
義〜さ〜の〜義〜さ〜あ〜よ〜同〜  
わ〜く〜さ〜ら〜ん  
お〜り〜い〜ま〜の〜お〜よ  
門ふと〜ら〜お〜教〜た〜り  
あ〜〜た〜ら〜お〜家〜さ〜何〜ん〜か〜の〜  
義〜惟〜克〜の〜家〜の〜あ〜と〜あり〜な〜り〜  
中〜半〜さ〜め〜糸〜山〜白〜の〜家〜橋〜へ〜出〜る〜た〜り〜  
さ〜い〜は〜あ〜〜ら〜り〜  
燈〜い〜の〜く〜あ〜て〜る〜  
さ〜ら〜い〜ざ〜れ〜る〜

リ〜キ〜れ〜や〜よ  
あ〜ら〜〜と〜  
ち〜り〜ね〜あ〜ら〜り〜と〜あ〜ら〜り〜  
義〜中〜お〜ら〜〜れ〜は〜あ〜ら〜り〜と〜  
このわ〜ら〜り〜乃  
ら〜ら〜い〜あ〜ら〜り〜と〜  
屋〜し〜り〜あ〜ら〜り〜と〜  
奥〜入〜台〜此〜交〜九〜糸〜あ〜ら〜り〜  
之〜外〜こ〜と  
交〜皆〜皆〜ま〜り〜お〜よ〜  
女〜ら〜ん  
あ〜ら〜り〜と〜  
さ〜ら〜い〜あ〜ら〜り〜  
交〜皆〜皆〜ま〜り〜  
茶〜が〜ら〜り〜と〜

腹族 兄弟 日記



なまなりゆきぬわあんとゆきぬ 恒老のほく尸は

さういそれ交けく人々 彼のを色細ういその交つてく人々あり

あさうりうかよと <sup>秘</sup> わされ交つてく人々あるの交けくは

物なりしとく <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

あししと彼のそんまを父息との交よあさりみしと

めさゆ <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

いさり交けく人々をその好交なるか物といひり

いさり交けく <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

所 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

いさり交けく <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

まいのこけく <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

好交のこけく <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

清 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

あんと交りしとく <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

あしし交 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

わ <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

君 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

新 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

あ <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

君 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

より <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

必 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

を <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

総 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

ま <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

と <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

交 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

交 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

交 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

交 <sup>秘</sup> 交つてく人々なりしとくは

かんめちん人のふかじと下りるよ月字あきとしそ公名別じ  
父息も女よよむせりとのちよ父息と女よ比せと云

何ん系と云よ破うれうりうり又そのかぬふ義ハヨク  
義中をくよりてこそ何とせんかん此れ御承あさうりうり  
父親とよこちうりいふ義なりりりり

少原とらんく懐くをえれとをくあはせめえと云とこれとく  
ありのつらまをいせん 娘よ父息おしはる

まことあ清くは 徳氏とやうと云うりこれいんごさ  
とくごさうとこの板ありかともおき良信とさうと云うり

義之原氏れれ女よりとらんく女としは律義ノ初は源とつんごせ  
うりといふあはれはうかめと云やうに云ふと所くまきまを

つらうれは白雲の命と官女とこれと云とらんく  
いふありと 徳氏のやうと云女よりと云義と云風家よこの

ちよよ又うやよと云るくは女よりと云うりく又いうよはか  
とゆうかの翁よと云りちうりく又いう

義之ち武の危れん乗れは源のれありはとありと云と

あひく板くも新あり義うくやると各恐怖や

義之助中ねやん源やと云れと云わくとに云うりく  
母のあしりかとも云うりかといふ今母のれと云

私取中ねと云りかといふと云ば義能うり  
じと云えんくはれあまう

中ねと云く母のれと云又調子よと云く又云と云  
せんをたしと云れりなり

いひあろく 義は初うく父親の初はあさうり  
せんゆしとかりのく 秘義又れ女よりと云ふと云この

そよ新と云は源よりと云りく云く云手物系はと云  
清うれの雲 清前松明

くくくくくくく 父息の翁  
あさうりなり 守はる後と云うり西うりくりゆり

父はれは常よりと云よりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
中書は川うりゆりゆりゆり

清うれゆりゆりゆりゆり 必之系れ息而のゆり

川久公之孫 御之侍氏一節 向より公ふくしゆと申すは半り  
うらとけぬ守りしき 此村父息の宿うらと申すは半り

まのりつりとは流儀 幸ひか同御りよまろくさうさめつりこ  
は服よ初りては夕息とれ而仍よあささるまのりかたりと申せは

あがりつりつりこ 夕息宿と面白くさたせり  
此と申んこまろく 移り 古系川息而よと申り移りては

わさうすもれ清むるこ 海の川さぬたり  
朝明形 又且用容儀 川久二首是と略とたよ初り

とハ初食こゆくあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり  
是こつて初明の公たり

さふとこれまともめ ばす葬れあさうりつり  
移りては清むるあり 無病のなりといふこあり

ゆきつては清むるあり 無病のなりといふこあり  
此と申んこまろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

惟老之曰はありて 叔曰は後深くあり  
まろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

かろせらりしりのら 秘 うれえり初し  
まろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

さ月のひかりあり 秘 夕月の光ありはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

それんとはあさうけに 夕氣君こは君のめれとい揚名人書れぬ  
中つまれぬとまろく 原の竹はあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

まろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり  
まろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

あさうけの燗夕息れまろくつりあといつり  
まろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

あさうけの燗夕息れまろくつりあといつり  
まろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

あさうけの燗夕息れまろくつりあといつり  
まろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

あさうけの燗夕息れまろくつりあといつり  
まろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

あさうけの燗夕息れまろくつりあといつり  
まろくはあさうけの燗夕息れまろくつりあといつり

手紙の夕日のあかりなりく 必南向の表西籍よりありて

秘 父息れ宿ちありしきれ家たりて

又去とてくみくゆりて 中居より出さるる宿業ありて

佳人 日本化 是夕教とのりて

去のひくくしりあくさぬ 是の取中宿との中候より折る

又曰君うさよりおと いてるしりりあれ

新くそわとおほしり 源の公と惟光のあ

おろししをわたりりて 源の公と惟光のあ

秘 惟光の公中よりそを宿たてあき

みと無念ありぬ根よよりりれ

子やと手ありてきといさう

史書言おわてしをわたり

く中よりり世稱名虎あり

をわたりりた為よ書載而

りりてしゆ身れ程あり

名よとらりてくうりて

うんも信あくありしりて 惟光のそ

人かろしけをぬ 是れと惟光の公中

とて教たりぬ身さく公を

とていんめいふ 惟光の源

せうせうか 惟光のそ

程いしり程 源の親は

まじりていさういさう

理とせきとさう源と

これ下ろまると 彼家れ

さそくせうらとこれ 貞節

これ世の人よいさうひさ 源よ

おいららあま 事

らりていさういさう

よりんき程よ公らり

秘 ありにさくは

ありにさくは

てみへきたりふ一夜のあやまらうとく面をぬつてと解し貞  
良と名の振よらんし頼よ却てまけけ公の御くさるに松丸を  
養人まうとせたりとんしと

わうれあもくまうとち 養人の子比志とれおのふこ

らう一取むおの ちんれ并よあまやと入ふりあふあま

りうーく いあうーくといああ物のお月つれなるあり

まれとおり なとよりぬとて母まうとくるあまのやう

と史をくさる れ下品のらぬくまうとありつあう

いとおの たのふおまうとやうよ源の市公れあう

いとあう 養人いとれあま

わうーく 下に好まなるふと源といつり

らうとあ まらあ

とそぬ こうとあうーくしきしり新の朝陽新のふれ

はれた くまき

まうとあ これ 秘 元標のふとらんしとんしと 養日

伊文介のりり 秘 元標のまに信とてれあうああ

義 秘 元標のまに信とてれあうああ

は 秘 元標のまに信とてれあうああ

い 秘 元標のまに信とてれあうああ

あ 秘 元標のまに信とてれあうああ

い 秘 元標のまに信とてれあうああ

ん 秘 元標のまに信とてれあうああ

倍 秘 元標のまに信とてれあうああ

移 秘 元標のまに信とてれあうああ

ゆ 秘 元標のまに信とてれあうああ

ゆ 秘 元標のまに信とてれあうああ

い 秘 元標のまに信とてれあうああ

な 秘 元標のまに信とてれあうああ

あ 秘 元標のまに信とてれあうああ

あ 秘 元標のまに信とてれあうああ

る所のいさゆん

西夜の物終のりし 美日と

そはぬあつせんらん女よ公おうせ終へともを元蛸の君あふい  
たひさつちあ終人ともちりすたの先あぬさういあり公  
その前ゆれつたあまの終る所を飛ゆりよあけ板と 秘用と  
は物終さうい何なりと公を終るなりとあり

妻女れりあ若くともうのふとくうりしりし 秘同と

人あふあめち

秘用とつたあくく終るき元蛸あれと伊よ

ひよあせさうりきんよあつちさく  
あつちさく物りきんともいあつち感しそのよ色 美日  
おのの終りかおを聲しよとりしりなり 美日と

水のうとを 美名うつちさあり 秘用

美日中のあ終あれ元蛸とくく伊あふあふなり

うとあつち 伊の公蛸と終とのりし

今ちとあひ うつせま対のりし

人のあつちと うつせまつたあまさ海と

かりいしれりり うつせまれりし

さけうああさく 秘用とつたあくくあまといりいれさうと

はくすいとらつせまれり終なり

ちけれあつちい ちけれさうりれあつちい

美名なうとさうりれあつちいよ又清めとゆりきんあを

くさうつちさうりれあつちいよ又清めとゆりきんあを

はくすいとらつせまれり 伊の元蛸とさうりし

いまいしとらつせま ちけれの終るりし

美人のあれんしうりりあゆむ 秘美日と 終るを介人下と

とうとあゆむと ちけれの終るを介人下と

清公あつちい ちけれの終るを介人下と

終りしとちけれの 美いと物あひさうりなり

美名原十六家れ終なり

はくすいとらつせま ちけれの終るを介人下と

秘用とつたあくくあまといりいれさうと

人あつちい 伊の公蛸と終とのりし

ちけれあつちい ちけれさうりれあつちい



あかんとあひのりよあひいりりしおの表

秘中秘君此物也

<sup>ひ</sup> 為常しよはふ荒死女の表と云はれりり僻みしは荒死女此物也

あひいりりと後切りしは荒死女の指しようしおの表と云はれり

と云はれりり表と云はれり <sup>秘</sup> 秘中秘何れに云ふと云はれり

かんうりりめし <sup>秘</sup> 秘中のかんうりりめし

くまぶらりり <sup>秘</sup> 秘中のくまぶらりり

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

毛詩云有女同車顔如舜花 <sup>秘</sup> 秘中用此義

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

秘中秘と云ふと云はれり <sup>秘</sup> 秘中の秘中秘と云ふと云はれり

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

いとあかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のいとあかんとあひのりよあひいりりしおの表

<sup>中秘</sup> 中秘のあかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中の中秘のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

今中秘のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

あかんとあひのりよあひいりりしおの表 <sup>秘</sup> 秘中のあかんとあひのりよあひいりりしおの表

要首事  
同云女指髪  
ヲ云ルニイ  
カハレ時ニカ  
一帯女ハ  
帯の時ニ  
指髪ト云  
ル也



秘伝書いふところなりよ不友と云ふところぬ童男あり

ちうとけりしをいふ 秘 ば下上候あり地保氏にぬと云ふ 義

物のたふしけりぬふりぬと云ふのけり 秘 右今席云ふ付

いふそのはぬいやく 秘 菊とおつる山人の花のうきをいふ

やとくよつけぬ 秘 出づ 秘 義云不産生男産生女

いや 秘 中平保氏の下と云ふ 秘 一人はあり

とそそのおのり 秘 けり 秘 義云保氏のり初の初より

ま 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

さ 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

明 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

二 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

内 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

義 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

り 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

とそおとけりあり 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

秘伝書いふところなりよ不友と云ふところぬ童男あり

前のり 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

あ 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

そ 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

つ 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

は 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

ま 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

さ 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

あ 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

ま 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

は 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

ま 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

は 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

ま 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

は 秘 義云保氏のり初の初より 秘 けり

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

の橋

あけのぼるといふ

必く入るをりたといふとあはれ

いふくさといふは

秘 ばらうら

初子と跡よりありおとれのりて

うらうらといふ

秘 中一をといふとあはれ

私云是れいはいのありきり橋といふ

いそ美らうらぬ

あといふは明石をいふ

うらうらの神といふ

金峯山と葛城峯を通行通於兩山召集諸国諸神令渡橋之時

金峯大神不勝呪力而且作始之首木一言主大神又且作始

申於行者云自形を醜夜間作す

美云比のたの事いふ

ばさうといふは

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

美云比一といと築れ一その中ねそと折一てら

人ともあつて一きりゆれいと、恒えの原へ下せしむ  
うらみと、それくとも、恒えの原へ下せしむ

あつてその車とを、原の匂をきく、その車とを  
行旅をとんとと、ちんちん、物とを

と、彼あつてよ、  
と、そのあつて、  
私言、若、常、な、と、原、は、是、と、より

恒えの物、は、中、ね、れ、後、り、し、常、若  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く  
恒えの原、は、お、け、と、山、守、父、と、ん、を、と、く

后君のとうりいり 源の約ち武の元ととうりんと

しりいづくを念とれ家後居のわし 義原の色

夕食れ宿のさゆと是こそ下れ去れと覚えしりいづくを念と

は夕食とあましく俗地よりあましくと假初うとうやうは後

井正より下のふこそれよとまはるる人あましくつげさ

いと一原原の所公をぬりこ花よさひりくあましくん花の

いふ後たり是まうく原の公とあうてりて

惟之といしうれまこと 源の所公よあうりしと名をまう

た下れちりきまらなり

かのまうら後たりきまらなりと所公よあうりんとそまうら

かのまうら後たりきまらなりと所公よあうりんとそまうら

惟之と私よこころぬ人まうらとわうれこりりまうら公よあ

まうら曲なりし何のまうらとあまうらと所公よあまうら

とそまうらまうらまうらと公とあまうらとまうら

びかとのまうらとまうら 細碎 日本紀 白氏文集

物語しとまうらとまうら 秘月

義云若の子比に秘よ花ノ義載りり又云び古さ後一河のふは

後漢書列傳 木上 獲覚信又興仲説書諫之文多不載之

女とまうらとまうら 義 源の名と夕食とれ名あうらと

まうらとまうらとまうら 秘月

中おとまうらとまうらと夕食とれあひりしとまうら

金つれまうらとまうら 秘 日本紀 案 日

おりのまうら そのまうらに身とあうらとまうらと

おらうにまうらとまうらとまうらとまうらと

夕食とまうらとまうらとまうらとまうらと

まうらとまうらとまうらとまうらと 惟之とまうらと

守りしとまうらと 假相 新撰示記 伊勢物語真名

惟之と私の守りしとまうらとまうらと

無あましくまうらとまうらとまうらとまうらと

とありしとまうらとまうらと ち武尼の宿とまうらと

女といわや

秘 夕方かれとの色

まじりりつ

名とれ宿より源の所へきたなり人をさ

さたりゆあられよ

名とさへあせたりありのうろ表よ

おほきよりあへいなり義こゆはうれとらり

うろくしきりよと

妻とといらんしきりよとえおり

あけふはらばあ人のいさるめしおもを

義しふはらば好えれりよ小肚文右太右實清貞公世は賢人右将

と稱せし人おれ好えれりよ礼きしこをれと賢良の一事と

人のいひしきりよ 史月

いとめやうくちのせん まわんを礼あてをさうり物とされ

源氏もいしして実をうんよあてしきりよとく何れもあて

あわしけりよと守まはれりよのあまう

てはあしきりよのあまうとあてしきりよとあてしきりよのあまう

ろうれくあわくよ前表うくまうり

義公一日不見如三年 又公長久たり内 三ふ表と

さゆく公といひしきりよ 源の公とよくあまうれいしよ

て公とといひしきりよとあてしきりよ

人かゝる守まはれりよ 義しきりよのあまう

いとあしきりよのあまうとあてしきりよ

後よりしきりよとあてしきりよとあてしきりよ

あり只交よ源のしきりよとあてしきりよ

いとやんとあてしきりよとあてしきりよ

方はしきりよとあてしきりよとあてしきりよ

よわ従之位中おれ女たれは源分れ徳公の族あり

ろましくおれは 源の節り家公たり物うり

いとあしきりよとあてしきりよとあてしきりよ

つりれ清を 秘 擲衣 短裳 旧本本記

じしきりよのあまうとあてしきりよ 秘 之福明神は公家徳けり日

河海云中国白少婦の侍者深々兄弟に愛さるる事 之極明証也  
旧本亦記大已貴妻亦妻細よ載らるるは是と異なり

且二之不嫁也海載大物主大已貴ハ一祈者考之此大物主の所  
妻之也此不嫁といふ所の因縁より父より母より嫁つた所のいふこと

たたりぬといふ所より嫁つた所なり  
義云中国白少婦の時已上異なりは夏河海身へられり

天延貞元天永之比寛弘の世より中世今昔の事なり  
義云白物嫁を例として連綿りらるる事なりといふらんや之極の  
不嫁ともいふらん中世今昔を例として下になりりといふらん

人の中世今昔といふ事なり  
秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

ありと云ふ  
秘 氏といふ事なり

秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

秘 氏といふ事なり  
秘 氏といふ事なり

定まらば亦も下しそいふこといひて 異日

かひまじりし

秘して打控くは墨うき手板ありと打控  
あつて是は父息とれいつくは新米なるあつん時よしと云う  
控ぬきあついつくは控んと打控く至(す)んねと云うしとん  
おろすれぬなり

さうりてに

さうりてに前世の誓りうきとていと見え

くみりし

まじい物よよ名はり

いさいと公やをきあうと

秘 原初なり

史書いさめり

さうりてに

行あや

秘 父教とつ初

よりうぬ清り

よのつらぬと末の初よ教

ころしあつはれいとあさやれりやらよわ

守ると

原ととりりそいひなり

いつまうらひなり

秘 守にたりとれり板ありとそ

帝王系圖之欽明天皇清宇系河国祖為人

水鏡ありとばたみなりは介は右左異といふは

箋云人の中を多ううに物も祖に在りて縁りてさうり

私云と光梅後之時に該云右甘露寺一位伊長にと光の

外跡多ううと和分れ書りて時額若傳無と云はし何

祖と云を録せりまうよ道遠虎へ傍りよ皮一孫合兵に

尸送り後しといつまう祖の奇跡しとく凡兵と合せり

一と三光虎いまうと十八の女れはりて後言れ乃思録し

ゆりてとりてと祖父道遠院年齢似合正とく合兵

せりまうりしを附ちいとを念なりしめはり後とを

知りてとそとてまゆり

なつりし事いさる

原のさぬなり

よにたうくしとあり

父息との初こ何りてうらぬ

いさつとあつてはのうら義山公よりあひ

行よ取中ぬれ

西本物後し取中ぬれ終しとて後よ

よく知りてとあひたこよくんつけゆり

守りし事いさる

秘 何れいさるそとあひたこ何りてうらぬ

さうりて取中ぬれ終し本末いさるゆりゆりし

なりあくるはこははのてとく人となりき程よあらん彼床よ  
ゆるり物く家よまら様よりくは来あらん念とたぬぬとこ  
くまくり

ふわうにういりか 義云々息と定てまわのあへんれとてり

後生のあれなを今くく原のくくいつそ後へゆり時はいのよ  
へとあらんようそ家よまらうらいつりやうありのりとはわ  
ととさむりゆりの約念をこ

念ううとまううううらあや 義云々あたうけさの念をまらさ

八月十五日夜 夜半ハツキジウゴヤト  
倍陽爰念とてむ見とていつり 義同  
ありれいとまういりや 曉をくあまらあうとていつりよ  
くは原小あうらありやうりあへはなむりてうり人  
たりりといまこ い農ナリりり ねを思ひこ

秘毛詩生民篇云 証右稷之穡一説文穀可収日穡 稗仙室家業  
秘云毛伯よいつりい農作の白こ家業といつりいあくととては

あたりよれうようい 高くたての物

わあうそまゆのまや 小清も清ふとれ義よわらひけき女れ

必 正いそしけふやえい人のまふぬとくうひの初と定あはに

わられなうおのうまれ 義いれとてり

あきまをこくこと 鶏鳴ればより起出さけりく小あはゆい

あいとまうく 夕日とれ性んくうりまうけ新とち取り

えんあは 風家うらうらかんと海よまうてりかかと曾

たりり人よあのよはとまき夕うかれといふやとにらうれと

いしあそまうに 夕日とれ新とわう人あまの白と婿の色  
まらひけきこまらあると名類こ家うあおさううつまは何  
ととたりいしまぬかたり



あゆみしき

巨りしきとちぬりあり

らりしき

乱りしき

中くしき

中くしきとぬのようき

こかくしき

悟得 ゴボク 三光 ゴボク 祢岩

なりしき

なりしきとぬのようき

その中しき

蜻蛉日記云云くしきとぬのようき

私云云くしきとぬのようき

くしきのき

確音多 踏春影

独列山中宿静向月中行何處水边確夜春雲母色

白氏文集

まろくしき

松とわたりしき

何れしき

海の匂

何れしきとぬのようき

くしきとぬのようき

くしき

作られしき

くしきとぬのようき

白氏文集

秘

只松衣まろくしきとぬのようき

くしきとぬのようき

くしきとぬのようき

くしき

海の匂

枝ゆりしき

前よしき

前載のき

海の匂

くしき

毛詩七月篇云八月在宇九月在户十月蟋蟀入我床

下とぬのようき

とぬのようき

但蟋蟀を文句れわたりしき

宿しき

義之師統をくしき

くしきとぬのようき

くしきとぬのようき





是(キ)となり  
私言は世のこゝろぬ契とて一語打た  
勿(ク)多(ク)なり  
此(ノ)世(ト)は  
此(ノ)世(ト)は

長生殿のありに  
七月七日長生

殿庭半無人私語時在天願作比翼鳥在地願為連理枝

玄宗之以之翼鳥連理枝

ありたりと感

弥勒 義云五十六億七千万歳

從尺尊入滅至慈尊出世備五十七俱胝六十百千歳 往生要集

你勸下生經曰將來久遠劫於此国界成佛云

いとうらあ

義詳なり

此(ノ)世(ト)は

私言は世のこゝろぬ契とて一語打た

勿(ク)多(ク)なり

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

此(ノ)世(ト)は

ふたつ月

山

ふたつ月とつてぬくと

ゆりてあるよ夜そつてより

いささしいの月十の月山はる月とつてぬくと出やら

ぬとつことつり是と十あ夜の晩なる月とつてぬくと

といさく不遠を徳因を徳とつていささしい山の隅より

出さ月とつてつり徳いささしいとつていささしい山の隅より

りのぬれ八十字流川のわらわらとつて徳のり来とつて

君やまやあやゆいといささしい橋の板戸とつてゆり

くらくぬとつて徳の山とつていささしいとつていささしい

是ホトとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

然らといささしいとつて徳といささしいとつていささしい

不知夜歴とつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

いささしいとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

ちとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

つとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

何必よ妻とつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

山のいささしいとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

安山の隅よ入る月のきりといささしいとつていささしい

ゆりてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

葉とつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

女もつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

とつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

月とつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

あけゆくといささしいとつて徳といささしいとつていささしい

つとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

つとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

つとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

つとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

つとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

つとつてぬくとつて徳といささしいとつていささしい

右をそまありあり あとのうらやけよ 右をそまありあり

そまありあり をそまありあり 此院

河原院

河原院を小浜防門ノ南万里山浜系極所息不の地眼よありなり

彼院にたか書駐旧宅也 又之系院と号すは後三ノ字互院なるに從也

延長清記云此日衆入之系院此院是たたか書源朝堂宅也

大元玄源朝堂宅を於院河だてり河原院也

私云何の院と云らんや 此院と云こゝか系院と云

此院と云らんや 此院と云こゝか系院と云

史云昔は下れ敷し皇居よ如し向論日皇居と語りりて也

表れ敷しと云らんや 連綿也

あつりりり 此系

此院よあ高形りあり 例も異なり

平生人よゆわ院と必と語りあり

何と云り門のあふまふと云らんや 此系院のいふ也

私云檢遺才三秋并よは系院よと云らんや 此院のいふ也

とりふをと云らんや 此院のいふ也

八重と云らんや 此院のいふ也

いふ 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也

あつりりり 此院のいふ也



はらへくあくかりー多れいんをめさーと

清くは

とりはく清くまうしい

陰胎後道あとのたうくく不舎取ある也

おさ中一何と整りのあまのり

鳥とりれおき中一何の級ぬとと君よこくぬとつきめやと

或云おき中一何を名余におされ何とと

水邊おき何枝川をといゆりこととを不祈おき中一いりあり

なうそれこととくよ君よこくぬとつきめやと

安おさ中一何の中一何と川中一とありと何と何と何と何と何と

又と鳥い鳥のあつき物とく懸ち何といふのたうとあふ東

座よとくく居と是と級ぬことと何といふとおとぬぬ人の名と

息者懸宿縁とらことと安とくくとせとくく鳥は中何といふ

つりしよつとく 係の何けりたり

安皮内へわりのあふれとくくをくく 兼よこくくくくくくくくくくく

くぬのとのむりりーたをり

安りりりれ等のあふるといれよんあふとく 兼安をきい由てあ

解れれとくくく 野あしらつ字よかあ

比とくくくく 比とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視

いと安りりりりり 是より係の視



又藤あとしとくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

おちりうふのー昔は後面とくはく面とじてありくみはる実日

父原藤あとしとくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

義親とありは當ふよまうこつれありのをうわ

辨一娘の時の事といひ出ぬこころ時さうりそめ娘

たりりーと機縁結熟のまうこつれありのをうわ

義はとくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

玉降のまうこつれありのをうわ

けよあつるといふ必の親をいひあつるといふと源のうかやうら

よここつれありのをうわ

義父玉降の娘の控切し玉降といふり縁さうりひあ結縁し必を

たときとくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

とくはさうくす面よまうこつれありのをうわ

義玄河海の義を御り人又その先の御公より月念

そくめとそ君はてしほのち海にそれこれの度

義玄河海 義玄指遣と新不判書云増茂より内より

ゆりりり男は人ゆりて今あうこれいとうくんそとといひ

かこせゆりこれいとう 義玄は川念をお當せり公あそ

れ奇の御公もあうあうさぶよりあゆし

私言あそこれゆのそくめといえそくつくと公務うきういかに

いあつにといふ公とわうりや

秘 解をわい時わういづらけそあうのまきりともいふしりや

今ハ御しあうまきりあはれあきちうありあうくそあうりや

おほつあうりはとわあきこりあこ又とあま御しあうりや

あうあうあういづらけあうの御しあうりや

ちいれんの義もあういづらけあうの御しあうりや

あうあうあうのそくめいづらけあうの御しあうりや

又義末の御しあういづらけあうの御しあうりや

私言あそこれゆりあういづらけあうの御しあうりや

あまあうの時ええとそくめいづらけあうの御しあうりや

私言已上矣 秘 ば義と義よ是とあうりや

私言あそこれゆりあういづらけあうの御しあうりや

今ハ御しあういづらけあうの御しあうりや

あうあうあうの時ええとそくめいづらけあうの御しあうりや

あうあうあうの時ええとそくめいづらけあうの御しあうりや

あうあうあうの時ええとそくめいづらけあうの御しあうりや

あうあうあうの時ええとそくめいづらけあうの御しあうりや

今ハ御しあういづらけあうの御しあうりや

あうあうあうの時ええとそくめいづらけあうの御しあうりや

今ハ御しあういづらけあうの御しあうりや

秘 ばいづらけあうの時ええとそくめいづらけあうの御しあうりや

あうあうあうの時ええとそくめいづらけあうの御しあうりや

あうあうあうの時ええとそくめいづらけあうの御しあうりや

わさげねうた家たうきさうに世とまうに海古れ子あれ宿し定め給  
宿とまうこり宿とまうこ 秘日

実者いやはきふとこめや  
さげうねうらとけね 実者おとく人申うせなる物う

みうわうれあもあふとさううよとさ  
わひきりれうり わあまうこり振うの神 秘日 実日

よしこれとらけ 海古れう家とらふまじ書れうれうと  
秘と一とたううせん世とさうう  
必あすれ子と女のさよせうくりにまじのしれうせそくあふれ  
人較あうねん家うれと相りし恨とらうさううとぬと

私あううあふとさううのれと海古れまをせうに家うれ相り  
義言海古れあまうれうれ相り必まう海の人較たう福と名  
案ありねと理とこめや

義始より源氏の名とわうとされさうせんく父無と名とお  
むつう源氏内時とあうあとし  
惟老いらる は世へまうれあうてぬうと物とまうとさうと

右をういんし 秘 惟老んく父とあうまぬ一人の格よまれ  
てあううりうりあうと

義言ひつかり源氏よわうさうりぬう 惟老ん身畧とさう 秘 日  
うまうとあうり 惟老ん父源の所ゆはけいひうらと相り  
承いとうく さうめは惟老んといううり 義格よらせうりあり

叔さやういとまうとさ物とさうと  
あううたう 秘 たりふしは世のさぬかりひうう

義言先達不唐書れと書 秘 考 唐字の西の奥れとさうりうとさ物  
さうれ前よあうと 父無の色は何れあうれぬか

さうけきとさうと 海のまうれうり所はぬよ物さうとさうと  
さうとけけ 義言をさうとさうとさうとさうと

とつりよいつりは候とさうとさうと 秘 集 下 日 中 紀  
はと清とさうと 父無のぬあうらうとさうとさうと海の所わうりてはとされさぬと

公らるー 彼の夕氣を公らるーくさる

かろーくおろー おくろりろくあろりなとれおそ

ろくくおろりなとれ

なりこりあくあろり あま 頼とろーめつろあしあくおそ

秘 彼の家よりろりー 彼のやれをとろくろりかと根を流すと

なれ公のろりー 夕氣のろりーと彼のろりーむり

ろりいりろりー 秘 禁中へはるをろりめきとろりーむり

彼のろりーとろりーろりーかろりあとの目と来とろり屋敷

それと毎月おをろりろりろりーあそと屋敷と目と

おとと後と云又いおおとろりろりろりーろりーろりー

あれいおおとせのろりー 秘 ちるろりろりー

秘 彼のろりいあろりーろりーろりーろりーろりー

ろりろりろりー 秘 義名彼のろりーろりーろりーろりー

月日とろりーろりーろりーろりー

いとろりーろりーろりー 秘 ちるろりろりー

ろりろりー 秘 夕氣かれれろりろりろりーろりー

清息而の公はくろりろりー 秘 きん公とろりろりー

ろりーろりー 秘 けいおとろりろりー

私とろりろりー 秘 けいおとろりろりー

清まろりろりー 秘 彼のろりーとろりろりー

おのろりーろりー

ろりろりー 秘 夕氣とろりろりー

とろりろりー 秘 夕氣とろりろりー

いあろりー 秘 夕氣とろりろりー

清ろりろりー 秘 夕氣とろりろりー

物おろりろりー 秘 夕氣とろりろりー

ろりろりー 秘 夕氣とろりろりー

ろりろりー 秘 夕氣とろりろりー

ろりろりー 秘 夕氣とろりろりー

ろりろりー 秘 夕氣とろりろりー

あしはらひくし 源の詞  
山橋 源の詞  
あつた廣き 源の詞  
くもえ 源の詞  
は女 源の詞  
り 源の詞

いさぬよ 源の詞  
あせ 源の詞  
物 源の詞  
伊勢 源の詞

あせ 源の詞  
物 源の詞  
伊勢 源の詞  
あせ 源の詞  
物 源の詞  
伊勢 源の詞

いと 源の詞  
病 源の詞  
あせ 源の詞  
物 源の詞  
伊勢 源の詞

いと 源の詞  
病 源の詞  
あせ 源の詞  
物 源の詞  
伊勢 源の詞

いと 源の詞  
病 源の詞  
あせ 源の詞  
物 源の詞  
伊勢 源の詞

いと 源の詞  
病 源の詞  
あせ 源の詞  
物 源の詞  
伊勢 源の詞

あせ 源の詞

必 只男いりく 常れと書し 乙二筆

妻后と書し 中書省の取と云ふり書と云ふ 筆はうん 一動

まいのまいしん 夕顔の必朽 取身なり

志らくさうてまい 原の作らぬ物

流りくしりく 鳴隆

おはれられとお目せよ お目せよとい作よし 流りなり

おはれられとお目せよ とも子法と書し

くまをれらるる 妻新りのみくし物

さうらひつれと 小中 新りれ子お流り

さうらひつれと 寛平に取おかりり十人二十

くまをれらるる 内宿を熱食も月暮とをよ 西宮紀

さうらひつれと 江強 流りりしと作せよと 子あよなり

火わわし 誰河火行 史記

本朝文粹才一云 題夜行舎人鳥養有三哥 源順 夜行 暮夜

必 警火旧府中呼曰火危彼誰何云 文選 五十二 陸潘雜漏刻銘云 標景測徽官戒井守以水火合茲

日夜以水守壺者為沃漏以火守壺者為夜視刻數 私云是漏刻之注也 衛宏估呼之篇較而未詳 注 衛宏深

日後日夜漏起室中矣城門估五伯官直符行衛士周戸較 木折估呼備火 河秘ホ之羊悲義載之

必 火の火のり 必 火の火のり

必 火の火のり 必 火の火のり

必 火の火のり 必 火の火のり

必 火の火のり 必 火の火のり

必 火の火のり 必 火の火のり

必 火の火のり 必 火の火のり

まどくたのびりしは次てよ滝にれとの井戸ありとの井戸と云  
と若禰と同一也滝に女人あり何れを云れ別のうりふ  
まのいづくもあわたりてはとくあり

延喜九年正月七日延喜人原楊宣旨云候邊に宇之今夜已上  
無故不系早禰着到且待後作者

延喜を勝武云凡夜行者内裏主人一人近衛一人起云一刻  
退子四刻但右起五一刻退寅四刻已上ノ義義載タリ

又云との井戸に延喜之をよりけりあはは物候よむのとうあり  
る字ぬりてはハ 義云ハと句と押りハ

押り入る 原の人のとあらして押り居る也  
秘 義云是といまはとらりてあははふあなり

さあり物 名無といそのまじ押してあり  
こいたつて 原の石をよ宮ふ記は是は何れ也

まらわれり 丸と云は昔教多を但又男子れ通称を  
びつ下 何ノ義男も也  
義云昔の日ハハ男子通称也無一孔子あり子たりと云類也

いとくはて 名をう視也

かまう人あはれ 秘 父うかのと云云者をうらこ  
たよあはれはとく 秘 此よといあまらふよ一は名をうらまをたき

とくし宮ふこあとうらとあまらり物あはれはとくといつ  
さうり流る名無といはとせわ也 具しせわ也

字とくはれぬ 物よ氣とくはれぬは也

去るくもく美なり 秘 滝にとくもあははは名あり

清本丁と川とせく 秘 中た父無ととらとくはとくはとく美なり  
んまよらんをの原の月を也

まいたるぬりうら ば人原の所方とくは美つけぬ也  
なげしとく 名押とあり美名のみ也

あはれりこくわ 秘 何れとくはれはとく  
所はとくはとくはとく 秘 跡は原と恐まはとくはとくはとく

あはれりこく美なり 秘 何れとくはれはとく  
美よらんつらとくは 原のたはとくはとくはとくはとくはとく

面影もえくくりたり

いしゆのうりあまに

に換云寛平法皇と京極清良  
不同清車後河原院歴覧山水形勢入夜月明取下清車置假  
為内府与所息而令密行之間平陸答戸有山也法皇令回行  
封云融候欲给所息而法皇作云汝存生為我為君何出此  
詔乎早可退歸者靈物袍清息取所腰羊死令召人々老翁清  
車令棄清息而顔色之不能起立杖抱棄還清之後召清翁大  
法師令加持護養生云 民亦載命分領くばり能叶たり

身れとと

秘 歌う身と恐怖あれとそれとて三れとて終つて夕暮と

ぬきとていふとありはと

いひしれぬくつとて 何とていひかぬとて息まんとあしとて

わたりしあまのときとて 宇多の清門の清翁とあまのあまり

はよりり終くとて 赤よ丸われはたすののひらき

はるまゝ 秘 歌う身とてあまのあまこととて

半りいれとて 秘 人のあまに 魂魄の二種とて魂

は月とてうけ魂とて五人の姿に五陰断たれとてあまのあま

行備生れ魂と七曜の屍とちりては 秘 鬼神とて 丑六の

尸のりのうとて小神とて是とてあまのあまのあまに十三

本有よぬきとて十とてあまのあまのあまのあまのあまに

魂去魄山のりわとてあまのあまのあまのあまのあまに

物じつとてあまのあまのあまのあまのあまに

秘 右をいおそり 秘 公とてあまのあまのあまのあまに

むの鬼のあまのあまのあまのあまのあまに 秘 世はあまのあまのあまのあまに

とあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまに

物の獲とてあまのあまのあまのあまのあまのあまに

うりてれ毛あい肌を刃とてあまのあまのあまのあまに

氣とてあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまに

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまに

うりて角のうりてあまのあまのあまのあまのあまに

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまに

秘 かいやくん 秘 切リヤカス史記 五月 日上



わかれぬといふかみぬく  
右近うあくとほのたうくさりさ

いとししれく前  
とけしたまふれとせいしれを

いとおほせと  
秘 滝見 中書 志そくさうしきんかんをい

いとおほせと  
秘 男 一くあよはとけいさうしんをい

作符とこれ知とう好

なりふしれあうり  
秘 惟光の兄

法作あとしそとあよまそれうくさい出のし

ふれ居る  
大貳尼のあいていとのりよは是よしり言

ふれのりふぬ  
秘 わうよまき屋のわのり一極

と公中一怒  
くうきんくうと

たうこれしりく  
秘 一をうたそりし

我中一とるよは母  
秘 一をうたそりし

とけのうりりりあ  
秘 一のゆめをたねのりし

吾れいきふぬ  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

あしり又吾のい  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

人かたはけき  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

安中ゆあれぬ  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

山一りゆる  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

文集才一凶宅詩  
梟鳴松桂枝 孤蕊棠菊叢 蒼苔黃葉

地 日暮多旋風  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

秘 何ノ義と載くは賤の末れ  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

よく融公此旧宅  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

秘 初名凶宅凶宅  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

捨り根の公を日  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

ちうれあふなり  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

君一り所とそい  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

りれたうまなぬ  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

又りれといふ  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

りれとより  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

おほいふふと  
秘 一はよふくうとまそく又ふをわり

火にわめくまうくまき 風をたけらうらに吹新るくうり

白打のうらうらゆわくうらのまうくまき

屏風まらうき 屏風まらうきとを思わたりとくうら

く海くくくくく 延喜八年清涼殿霹靂後貞宗法師俊清涼

ののわくくくく 殿之時字大人足音是邪神取為也 孝宗王紀

とく衆くあんとおろし 惟之と信巻のく

わりのくくくく 惟之と史書に好父の取

風のをくくくく 風のをくくくく

位ばまよとより信 位ばまよとより信

ふれわりのかきく 奥入言ば方を代の年記宛分と信

いとわまういふとせうら信 奥入言ば方を代の年記宛分と信

作名陸方哥し 作名陸方哥し

わりのま世のまり信 今うく信

お月守好くまき 若葉よまをり

ろくまむくくく 若葉よまをり

月よまゆくく 若葉よまをり

月よまゆくく 若葉よまをり

かりくくく 若葉よまをり

くくくく 若葉よまをり

束中くくく 若葉よまをり

りくくく 若葉よまをり

右をれきく 若葉よまをり

君とくく 若葉よまをり

右をれきく 若葉よまをり

君とくく 若葉よまをり

右をれきく 若葉よまをり

君とくく 若葉よまをり

右をれきく 若葉よまをり

君とくく 若葉よまをり

右をれきく 若葉よまをり

られ白より 深いより内より 切りぬくわとちたをのめく

ほと備されぬが惟だれあがりて出しきこととそきて路を  
いふ成のてて成 秘 杖子若翁をい面白し 義日

必阿まよりよあきいれつろりしよる中りくことおほしぬかか  
とりりまのしりおはよ海となうにぬむ杖子若翁の翁よ歌  
定初拭海と作まりのいふを

えととてめい 海の海にぬれそめくいふとめくうは  
向くむせんらういそ とうくぬいひのうま海  
とまうわう 秘 浦海

まけふ山く 美物れりく何何とくまき世のれたのさ海と美  
まのいどめりう 秘 此の山くとさより惟だれを初それとい  
とそくば夕魚とれ新と不思議あのみあを

まいたるゆ 秘 不例  
秘 夕魚と自然のく遠例なと 路のりあがりつるかたと  
さばいし 秘 原の初たり

かの山よりしと 秘 上りしといはよりあく  
さあ原の海にぬまにふはされて惟だれを初すよとそと  
秘 君よりよりとくことよりと福とのとあくといくと  
とと 秘 惟だれを初りてかや海の初それといはと  
とと 秘 此の山くとさより

は虎守 秘 原の初をかりしと  
これ人かより 秘 此の山くとさより  
ののいひのう海をぬくう海と惟だれを初

きんちくを 秘 眷原  
さくさくこれより 秘 原の初  
まのいひのう海をぬくう海と惟だれを初

くれつの室か 秘 夕かれ宿なり  
ごうしのかさし人 秘 此の山くとさより  
かの山くとさし人 秘 山守をといはより

おの山くとさし人 秘 山守をといはより

多き人一人は幾とまじりあはるるなりと  
いし人一人は女房 惟光の父の女れと  
まじりくつとく 史書 吉原紙よは付ありと

は交離と名と 日本紀云水神因象女因象此云英邪  
波伊集丹所生神に髪白く老嫗神こと

とくしつらうらふ髪をまじり川のうらぐらむとてをよく  
一洗くしつらうらふ髪をまじり川のうらぐらむとてをよく  
てつらうらうらふ髪をまじり川のうらぐらむとてをよく

秘とくしつらうらふ髪をまじり

つらうらうらふ髪をまじり 秘日

明く水の髪をまじり 明く水の髪をまじり

これ人と 夕方の髪をまじり

うらうらうらふ髪をまじり

惟光の車にのちんありしつらうらふ髪をまじり

後河勢聚国史云弘仁八年八月從三位攝常子葬以席暴葬  
髪のかと髪をまじり

梁同といわゆるあり延るや 一答ありて延るはつらうらふ髪を  
まじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

まじりかありと 延るはつらうらふ髪をまじり

おわいの、君さうら 秘 連枝中一よ、中中ねんうり

るりれりふたりあき津中一よきん

義史は町をえんのかいさうく行へし原を巻中一より宮を  
りれとにうゆりとの 秘 原句

ち武めりれそのみこひそそとまうへ中中ねん原宮よ

それ家なりりうぶ下人か 秘 父息とれ釋亂とまうは

うんとうくれあまうなり

おらうりりさ 秘 ば病人さうらあらうさくおそくお出り

叔母よへくきうりや皮習のうれおれ釋よふれりりと宮よ

祢よさうりの 秘 祢子よさひおそれて

おりのりりり 秘 父教とうせゆりり八月十六日の

るし九月廿月よき節りりり祢子こサケ田の釋よふれ

あまうよよりりりり 秘 祢日

とよふさやこま 秘 父疾嗽病なり

ひひひ 秘 父を祀たり 秘 祢と指して宮よ 秘 在日

あつてさうり 秘 中中ねん句

一 秘 義史念法よ妻一く君のひり

まうり 秘 中中ねん勅史とんりりりおりのた友の君を述つ

いれふいさふれ 秘 中中ねん句 秘 弱釋

の 秘 中中ねん句 秘 弱釋

定 秘 中中ねん句 秘 弱釋

ひ 秘 中中ねん句 秘 弱釋

光 秘 中中ねん句 秘 弱釋

あ 秘 中中ねん句 秘 弱釋

あ 秘 中中ねん句 秘 弱釋

あ 秘 中中ねん句 秘 弱釋

あ 秘 中中ねん句 秘 弱釋

あ 秘 中中ねん句 秘 弱釋

あ 秘 中中ねん句 秘 弱釋

あ 秘 中中ねん句 秘 弱釋

幾言有る大御名此兄在中一弁と云く人あらず

大御なりと云はむ 秘 夢と云ふ大御名と云く人あらず

目られて惟光 秘 父鳥と云ふ山へ送りて惟光の御名

今いふと云ふと云はむ 秘 惟光と云ふ山へ送りて

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

とくは 秘 承と云ふと云はむと云く 唯光の御名

かゆの氣ぬ

秘 惟之のいりしと 史書曰

義 史の源の清いれとことごとく

わまの君やまうしと 大武の尼

さうぬ法師しと 惟之の尼と大武の尼なりとの根のくまは向

端知せて叶ちぬ法師しとことごとくはよひあはし 秘 史書曰

しと終つ所 義 たりし所を向ふと 耕雲の義

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

義 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

ほのまう女房 二原はよまうぬ女房なり

さうにたとなく 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

此ら終つ所 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

何れとく 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

いしとく 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

くおりのいりしと

史書の月惟之の公とていりしとていりしとていりしとて

いしとく 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

此れ以の清いれ 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて 史書に記す所のまぬとて

史書但多記狀と伺へるに玉印と多記狀しるの番

かりつまね 東山となり 君山と云

何よりさく 只その何よりな海なり

こけりしれけ 打明せりけ

それ金よハ 板金ありて女をたをたうて海

丁多しそめ金也 義を葬送ひるを言合所の下 万葉

身後扱てしより何多記状に云り 又無言合所十

丑之切徳と云りより一書なよんしよりと云

てしりくれそや 諸寺物後後夜之者傳と云り也 己上

清のあまの 秘 十七夜系傳の人めと云

秘 縁起云宝龜十二年物建立延暦十七年更造大佛殿大同二

年又造伽藍比観音寺堂前之額清水寺大門額是坂上田村

凡私寄附沙弥賢心 以下畧之

は尼云の子なり 秘 惟光の父のめれと云

大徳 日本紀云 肅宗創天下名山賞大徳七人僧之官也 云

海ありたり 秘 源氏の公そのいなり

入のりまて 秘 源のば板金よ立りりなり

右を屏風を 秘 父がれと云雲りの屏風れなり

右を 秘 右をりりなり

おそ 秘 源の公たうかれとのと云

身と 秘 源の死人なる身と云りなりは源

ちと 秘 源の公と云りなり 秘 ば父息と云りなり

つ 秘 源の公の大切よそのいなりなり

ね 秘 源の公の大切よそのいなりなり

西 秘 源の公の大切よそのいなりなり

右 秘 源の公の大切よそのいなりなり

右 秘 源の公の大切よそのいなりなり

右 秘 源の公の大切よそのいなりなり



いひさうれ  
実右をの佐出し〜と臨よしお〜とこれいんとし  
そ〜い美りありを〜  
とま〜いゆらんとなり右ををありん

ふとりりありん  
海のいん  
海の右ををことりりて右ををあり

とあり〜河を然し現りありり〜  
杜子存云死已吾

右生別常制と作まり〜と死〜とにぬる〜  
秘後日

こわり〜と〜  
秘中あられてと〜あられて〜  
秘夕良の目と

ろりあり〜と〜  
右ををあり〜と〜に限る命を〜

〜と〜  
秘〜に右をよ〜と〜と多れめと

〜と〜  
右ををあり〜と〜に限る命を〜

〜と〜  
秘中あられてと〜あられて〜

〜と〜  
秘夕良の目と

〜と〜  
秘中あられてと〜あられて〜

〜と〜  
秘夕良の目と

〜と〜  
秘中あられてと〜あられて〜

〜と〜  
秘夕良の目と

〜と〜  
秘中あられてと〜あられて〜

〜と〜  
秘夕良の目と

〜と〜  
秘中あられてと〜あられて〜

小書  
院之をく  
院之をく  
院之をく

坡堤記 菅田水日坡記

防鴨河使と云辭と云す記 菅田川の堤と云す記

御句りまゝとい

史古 綴入るゝの御七

石の元よりとてつれぬべき

秘 川分と載せに

秘 綴り

石の元よりとてつれぬべき  
おとよとてつれぬべき  
おとよとてつれぬべき

おとよとてつれぬべき

おとよとてつれぬべき

秘 二条院へ御り

おとよとてつれぬべき

秘 惟光の御り

おとよとてつれぬべき

秘 惟光の御り

おとよとてつれぬべき

おとよとてつれぬべき

惟光の御り

優婆塞戒經中流よと洗又よと動令と中流ハ川のあらん

私わたりをうけは清くはれ親友と合はるる

すくなくとてつれぬべき

秘 惟光の御り

君とてつれぬべき

秘 惟光の御り

あやまらばつれぬべき

秘 惟光の御り

あやまらばつれぬべき

あやまらばつれぬべき

二条院よとつれぬべき

西とてつれぬべき

兼 西とてつれぬべき

西とてつれぬべき

清いのりつれぬべき

善くつれぬべき

まわりつれぬべき

外典の清行を陰陽景照よと

世よとつれぬべき

世よとつれぬべき

世よとつれぬべき

くろつれぬべき

彼をよとつれぬべき

られぬべき

られぬべき



源の公とつうくありて何と云ふと書せしめり

せめくはしゆく 兼 史公とせめくなり

大なりといふし 必 せいめいもかき後くとりし

今よいつの程も家の列る様よ 必 せいめいもかき後くとりし

たてし思ふに 兼 史公毎日かんまういぬなり

大案日 兼 史公毎日かんまういぬなり

なごりし 兼 史公毎日かんまういぬなり

かこふ 必 天下弱穢 兼 史公

お月つ 必 天下弱穢 兼 史公

日 必 天下弱穢 兼 史公

大 必 天下弱穢 兼 史公

後 必 天下弱穢 兼 史公

承 必 天下弱穢 兼 史公

史 必 天下弱穢 兼 史公

史 必 天下弱穢 兼 史公

なり月 必 三十日案 兼 史公

あ 必 三十日案 兼 史公

ん 必 三十日案 兼 史公

者 必 三十日案 兼 史公

於 必 三十日案 兼 史公

誠 必 三十日案 兼 史公

史 必 三十日案 兼 史公

史 必 三十日案 兼 史公

史 必 三十日案 兼 史公

史 必 三十日案 兼 史公

史 必 三十日案 兼 史公

史 必 三十日案 兼 史公

史 必 三十日案 兼 史公

史 必 三十日案 兼 史公

史 必 三十日案 兼 史公

何たりとわづなりのり 中書 之をあらわしぬれよくりしつ

私言さうしとあらぬ者のりをし格よたをさ身して言初と  
さうしと下りりや 秘 格のぬいひのり 格能へ

たそとぬらうとぬらうと世よめつとありぬ格ありし格よ父息と  
公と格とぬらうと 秘 私父息の格とさうしとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

さうしとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと  
ぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうとぬらうと

くありしはまうきゆなりなり

美らとくは新米とを仰し見ゆるはまじとありしは河を

ち河らりし

ねむくく

七日とけりし神之日 北庭菩薩因縁經十編末と

よとけま

初七日より初七日まうく四十九日れり是日れ佛像と仰して

まんと知りしは廻向と仰しはまじとあり

何れも実なるは佛なり

存と述るは夕魚と存せの時けりしは

なりあき臨しは

つかとまうくは

おむ多し

夕書又母なり

之位中におとあん

いしりしは

あうまればかとのかりしれま

以中におまうかおる

こととせ

中におとあき

中におとあき

中におとあき

右のたもと

物おら

お

弘仁十年十月五日官符左右京職各置職二員

山里よ

山里よ

山里よ

山里よ

山里よ

山里よ

美事はお軍いこもつてさういふよこもつていふ事を

よれんよれん 是よりたうかたの公とるこ

はつたうくのきりさう 物さうとて恨むれあうよと

りさうとては公をさういふ

たしたとて 前よ漢の政中ねのさういふ

おとさうりそれとれたの折るさういふ

ありまも西さういふ 漢の公に

おとれさういふさういふ

美政中ねれ子のあうかたなり

中ねさういふ

さういふの 右をさういふ

女よさういふ

美事ば候よりさういふ

さういふのさういふ

人おとさういふ

彼中ねあは

根をさういふとて後さういふ

夕方のととさういふ

とさういふ

よさういふ

そのあつためのと

とあつたさういふ

とらあつたさういふ

あつたさういふ

あつたさういふ

あつたさういふ

あつたさういふ

あつたさういふ

あつたさういふ

あつたさういふ

あつたさういふ

彼夕なりかぬとあり

美名をくぬゆし

秘 夕顔の宿と海の君のひり  
とば所家のあまはうりにけむと  
竹の中にあそびし  
白鶴 和名伊倍止 本草云頭短尾也  
ありてはるれ鳴しと  
美名をくぬゆしと  
美名をくぬゆしと

このと名刺るうこひ物なとにやまめ知よあめくあはば時あ  
このあまよあめ知よとひ出さあこさとあうりあてさよわ  
一説只あやりてはるれ鳴しと  
物とあうりてはるれ鳴しと  
美名をくぬゆしと

とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと

とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと

とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと

とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと

とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと

とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと

とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと

とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと

とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと  
とてはるれ鳴しと



女ありやうくに

五行大義 卷二論能 陽體剛強自在陰

あさむらむん

兼須從陽婦人より之從之礼云自当之義 義曰

あましん中人公よ

らら公のまらら

これこの清このま

いゆくいよくうあ

えれららりのり

さ海公とほら

君しの中名糖と重とあうひれいゆあられえ

美えれららりのり さ海公とほら

の守りし まらとあり

秘あふしらの元あ そつり 変化

たつくんあせ 義曰 ばか

皮公か いひり

しく公よりし らり

公を稱名 いひり

かり ら

若し いひ

の いひ

公の いひ

を いひ

者 いひ

右 いひ

和 いひ

ら いひ

ら いひ

耳 いひ

海 いひ

れ いひ

り いひ

と書物より物終のさぬるなり

わりし厚くは 秘 といえ蜂の音信のよきとあり

うしとありとそよよらと 秘 といえ公使のうしとあり

そくくうのそくくういといふとあり

をくくうのありんと 秘 伊とありなり

秘 伊とありなり

源の三儿とありと 秘 といえ遠例とあり

うけあまりなりとあり 秘 といえ源のあり

幾言たわまりとあり 秘 といえ余而のあり

元 源のなりとあり 秘 といえ源とあり

信志ありとあり 秘 といえ源のあり

花志ありとあり 秘 といえ源のあり

ありとありとあり 秘 といえ源のあり

馬表紙ありとあり 秘 といえ源のあり

秘 といえ源のあり

秘 といえ源のあり

秘 といえ源のあり

秘 といえ源のあり

先つ

りの

いづり

定輝の

いつ

養

秘 といえ源のあり

ら

は

結り

養

こ

又もつれなる者命れ面目たる者美しき人  
つれづれと

清き心とらしれたる人  
とわらふと馬鹿な人

美病後のさゆ  
美病後の句とばかりは定極れと  
月曜に

おろしきとさしひり  
さしひり

定極の句とばかりは定極の句  
一向よくさるる人

一向よくさるる人  
よる候と候の字あまよく眼をゆく  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句  
定極の句とばかりは定極の句

私言よこの義の義を叶つたりなるに志ありてこれに  
れあるいとあへて彼人の氣分もゆるしとつるにうけつたり  
<sup>義</sup> 務の業よ多とけりて子後撰にたかき此まをき大輔のうり  
ちかきといひけるはふあよゆりの務の業よ多とてしるし  
山室のにおのよひしは二務の條のあひくことにてありいむる  
あひくといふこと 源のたるはさうりにのめりたり  
とりあたまてかおとんとつせく 義云かおのばは源の義を知りたり  
とつるのしつにいと 河合の義一紀のたまは一義  
沛公おつりて <sup>秘</sup> 源の好文なりからりくくの義

<sup>義</sup> 弟の子弟なり  
かおのたるもありにて <sup>秘</sup> あひくと小君よれりよあり  
かおのたるもありにて 源切よくわたりしをうしとるくこと  
いふは沛公の義いふことありてあり  
義云新瑞の義れをうしとありしと名よ二義は源の義  
ちかき源の義はのりぬていひの義一の又よる人かおよした  
のりりくくの義よるは源の義いふことありてあり

おなり 出いふこと <sup>秘</sup> ちいしにきつりぬと媛くくつと  
はしきしとつりてつとつにき <sup>義</sup> 字はいうはなまことわつたよ  
ちとつりしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
のめ <sup>義</sup> 一正のあはしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

<sup>義</sup> 中義もつさうりありぬに風のりともよるまはるはるはるはるはるはるはる  
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ  
あはれしとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

箋云は後苑人かねのゆ中と原のありしゆは別増新は  
むうひらく人ひらりあれかねのてりてりてりてりてり  
ふくせりの字もとあくゆしと事やと事 蘇めは海に

ゆりりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

箋云おりしゆ家よほくくはをいひては川が奇物と今夕  
はらゆ物より志りてと浮世なりは又よりゆゆゆゆゆ

又とばたよとるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
彼人かね十九日 和箋よゆりゆりゆりゆりゆり

必十月に六日れりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
箋云又ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

夕かこれとの家傳なりかか人の事あまゆりゆりゆり  
又事ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ふえの法必とゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
李於王記云天慶八年正月十八日室正五位下友寛子卒ス

二月八日尚三七日於叡山东法必堂修誦誦布施名香一畧  
僧共錢万百文 曾日記云は男は後つぎせんあくゆゆと現

此ゆりゆり法必ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
法必と味を在止視西院弘仁王 長四月五日結梅秋七月上

旬土不之功申就移行法必誦延曆寺縁起畧之  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

清文ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

箋文系ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

舎せりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
箋云於文自作之例ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

建一黙号延命院自割於文  
家室之四十九日願文之例必云重明親王家室友原氏四十九

九日於文後相公朝經書之見文粹詞書生者必減尺為未  
免梅檀之烟示是悲兼夫人於逢五衰之日

史古梅想ニ五衰ト對シ名ハ梅ノ字千ノ音シカルト云

それ人とあへく  
父うかれとをわくさね  
わづれとそり  
秘あたるふ路

阿まははよゆり  
箋云法宗と成信は自心用方其の殊地ニ依

超世之悲願ハ化カ不殺ハ彼抄取不捨ト云うせて環ト云ふ意

箋史曰十九日の三日は東方菩薩ニ依西方弥陀ヲ對スレ法宗善の如

观音れりや説りつよひついの空を云菩薩と對向ト云を敷し

あかくあうらうらうらと云ふ  
箋云原自化教之の原と儒者たる

一説ハ一係割止ハき後其のよりト云

何人たりん  
秘箋 文章博士の句ト云わく  
正く辨れりり  
箋云多教とのりやといふの宿世あり

人々と情士のりりなり

らうぬととりとせく  
あよあうらうらと云

秘なりと云ふらうらうらと云下級といつきの世ありけり  
箋云今日法縁の切匯と云く何事のけりト云ふ解脫のよきこと

箋とけり解脫師流じと云ふはけり  
つらひはれ世と云ふ

若解脫門ハ何時入るべきと云うは自然よりなり又一説ハ

せれ申すをね  
秘施りり  
私云箋の分類も化の院不載ト  
朱書長也箋

これと云うは  
秘史十九日なり  
私云は毎日箋

箋云字十九日なり  
中有りト云ふは  
笈云天名ホ心極極者ト云生ハ中と云と云ふト云

廻りまうと云まうは遠信遠源ホ根と云  
て吾果と云世

やんと云中陰院の院ト

処お定のより  
存りり  
法相一宗ノ義者人而人の原不

之皆必中有り  
位と云くを  
持りり  
云

移んよと云  
あはれ  
源のさぬなり

以中おと  
源のえり  
よと云ひ出なり

か  
おと  
秘  
玉うらうら

か  
おと  
秘  
玉うらうら  
びうと云うらうらと云

うらうらと云うらうらと云

彼父息れ御しりい

其父息れ御しりいなる父息といひに有りたる也

養不養傳養たりきりし

多しうあふねと 養源と名なりと云ふこと知り得也 実月

惟之と云うらりきしと 秘 自然惟之と云ふ人方うらりといはれり

いわれしと云ふと何れも御も 養言と云ふは御へうに是は惟之

まう人しと云ふといれり いれりなるは内と信氏と高野

けしをれき 信國と云ふは御よといはれり

おれしと云ふはわりてはれ 惟之よりと云ふより

三時よりうらり父息とのうと云ふは御うと云ふ御のこころいと

と云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

らしと云ふは御と云ふは御 秘 受承の子といはれ父息と云ふは御の中を

おらと云ふは御と云ふは御 秘 せりて御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

ば家ありし 養玉うらり御と云ふは御

矣楊名女書は御女又一人と云ふは御 實日 御言

右をいし人 養言よと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

右をいしと云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

君と云ふと云ふは御 源と云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

と云ふは御と云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

しり君のうら 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

和言あるは父息とのうと云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

は御と云ふは御と云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

わさゆ 養言は御と云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

君と云ふは御と云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

は御と云ふは御と云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

ありしは御と云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

そいしりし女は御と云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

川原流しと云ふは御と云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

阿比事しりしは御と云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

と云ふは御と云ふは御 秘 右をいしと云ふは御と云ふは御と云ふは御と云ふは御

とりたに... （右）

林之月内... （左）

伊予... （右）

又も向式... （左）

又... （右）

又... （左）

又... （右）

又... （左）

又... （右）

又... （左）

又... （右）

今... （左）

又... （右）

又... （左）

又... （右）

又... （左）

又... （右）

又... （左）

又... （右）

又... （左）

又... （右）

又... （左）

又... （右）



さうせうくとてししはうりー

かりんと ねかりんとりくこはくありし所の親を源の公り

元禄うりーとさいつきりこは候定帳をよさうの帳と

りよるるあり 箋を九月未あり

必發立をこは海にりのあめの字勢と唱てさうーいりありきの

字法に下ーい必發日

るりーとさうりーと二るーりてさうり秋の芳うれ

箋を必多さうーい必多さうーい元禄と是十月の空あり

秋の芳うれと神さうの候信以類なりーといり通れ好ま可思之

想を去と秋とれ中ーい交をこりふこ格遠に類を去さ其と混し

新ノ秋ーい其とさうり

箋は元禄正家小只九月並の年と分あ止んーいさあに上約は伊左

非之月朔日比よさうりとあはあさうーいさうい高河に十月は

わすさうりよをさうり日とさうりあくとりーい九月津之

冬れ其日の日とさうり細きい是は十月は元禄とさうりさうり

言九月は秋のふれるこは十九日とさうり秋とさうりの元よさうり

ふよりよさうりさうり元傷の公切なりさうり候ーい候とさうり

是今日新秋と二あり候り助産とさうり候ーい候とさうり

候とさうりさうり候とさうり候とさうり候とさうり候とさうり

可成伊左公下玉れりさうり候とさうり候とさうり候とさうり

うりさうり候とさうり候とさうり候とさうり候とさうり候とさうり

冬かれどのふ候なりさうり候とさうり候とさうり候とさうり

元月元氣傷れ候と治定止んまこ然に秋の芳とさうり候とさうり

河海之東交女市集とさうりーい今新正候とさうり候とさうり

なり世たりりせば 已上箋ノ分候と

なり候とさうり候とさうり候とさうり候とさうり候とさうり

秘 是下りり其の子也 今葉は候に帯本れ候の信氏候名の

こしとさうり候とさうり候とさうり候とさうり候とさうり

物いさうり候とさうり候とさうり候とさうり候とさうり

いとわさうり候とさうり候とさうり候とさうり候とさうり

とさうり候とさうり候とさうり候とさうり候とさうり

とんくうりうりわきりうきくつんゆれい公基源名平

箋云是と云探のりうにわくは夕歌とれりし

所祝今案云は辰尋本は辰尋よ名のこましくく又く探のことと

ふん探りゆきん人の物いさうあさよば中をよあれうらう探

ぬいゆひしとわくんとあつり中尋尋本始うりばあつに

到りて探と好交とをれまうにちあうりしきりあうりし探

は二辰尋本、は辰尋と探とをしありし

箋云は中をの探の二辰は物探一物ゆりしとを尋本ゆりしと

ゆりしとを尋本ゆりしとを尋本ゆりしとを尋本ゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

く探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと

とを探りゆりしとを探りゆりしとを探りゆりしと



